様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年 ５ 月３１日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2012
課題番号：22500907
研究課題名（和文）
メディア活用による授業実践力を形成する臨床型「校内授業研究方法」の開発
研究課題名（英文）
A Development of clinical type "Method of research on lesson study within a school" for teaching practice by media use

研究代表者
浦野 弘(URANO HIROSHI)
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：50185089

研究成果の概要（和文）：校内研修の視点やその方法について，①小規模校での研修方法，②中規模校中学校での自律的な研修方法，③保育園・幼稚園・小学校・中学校が連携した研修方法等の実践を追跡し，研修課題の設定がメディアの利用を促すことに効果的であり，自律的な研修のためには，付箋紙を用いたワークショップ型の研修方法が効果的であることを見いだしている。とりわけ，教師の気づきの提案が増え，その後の議論を深めることに効果的であることを示している。これらの成果をもとに，教材開発の経緯及びそれに基づく子どもの変容を，担当した教師がみずから追跡した実践事例を報告している。

研究成果の概要（英文）：This report describes the aspect and the method of the in-service teacher training at the school around.
①at the school where number of teachers is little
②Autonomous training method in medium-scale school junior high school
③kindergarten, elementary school, and junior high school cooperated
It is effective the setting of the training prospects presses the use of media.
For autonomous training, the method of training the workshop type that uses the tag paper is found to be effective. Especially, it is shown that it is effective in increasing of the proposal of teacher's awareness, and the deepen of the discussion afterwards. It reports on the case with the development of teaching materials that one teacher did based on these results. The transformation of children's learning is shown there.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：科学教育・教育工学、教育工学
キーワード：①教師教育　②授業研究　③現職教育　④教育実践　⑤校内研修

１．研究開始当初の背景

(1) 教材・メディアと教師の関わりについて

これまでの教材開発研究の多くは，下図の①を通して③に作用するような働きかけと捉えている。その成果は子どもの学びに大きな効果を及ぼすものであったが，③のメディアを介した際の教師と子どもとのコミュニケーション等の詳細な内実に関する研究は少ない。一方，授業研究では②の関係に着目した議論がなされ，多くの成果が得られている。研究代表者もカテゴリーを用いたコミュニケーション分析を試み，②の効果について検討を行ってきた。しかしながら，子どもの学びの深化や思考は③を通して行われているにもかかわらず，その詳細について，授業検討会等で語られることは少なかった(研究代表者は，これまでに中学校理科の実験場面を対象にした子ども間のコミュニケーション分析等を行ってきており，その結果，グループ内での主体的に観察の視点と検討の焦点化等のリーダー的役割が重要であるとの知見を得ている)。

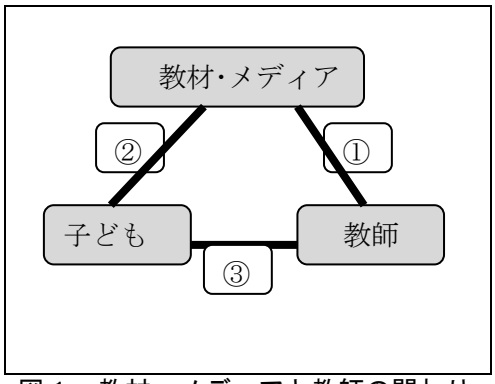


図１　教材・メディアと教師の関わり

教育メディアを活用した授業には図中の③の相互作用による子どもの思考を支援する教師の働きかけが重要となる。さらに，一斉授業以外のグループや個別の学習においては，②の子どもとメディアとの直接的な関わりや操作等についての教師の配慮や支援の在り方が，特に子どもの学びを左右する。このように，②の学びを支える③における教師の日常的に配慮した働きかけが子どもの学力向上につながる。その中心をなす教師の力量は，発問力にあると考える。さらにその発問力を支えるものが，教材研究力・教材化力である。この形成に資する学校における「校内授業研究方法」を確立することを本研究では目指す。

(2) 校内研修会の方法

校内研修会において，教師の発問力を中心とした力量形成の方法を開発することが急務である。研究代表者・分担者はこれまで多くの校内研修会に支援･参加をしてきたが，そこでは，子どもへの直接的な教師の働きかけや授業のねらいとメディアの役割等についての議論が非常に少ないことを実感し，その改善に努めてきた。その成果を活かし，本研究においても，特定の教員に発言が集中することなく，実質的な全員参加型を目指し，授業デザインの考え方を援用したワークショップ形式の授業研究を実施する。具体的には，全員参加による対等な関係から，子どもを観察し，教師の発問等の働きかけについて検討をし，教材やメディアの効果をも議論し，改善の代替案をグループ毎に提案する。この作業を通して，他者の授業から自己の授業を改善し，また授業提供者の授業改善にも資するという教師としての基本的な姿勢が形成され，授業実践力が培われる。さらに，これまで指摘されてきた校内研修会での課題をふまえ，学校という組織にどのような効果をもたらしたかという視点から効果測定についても検討する。

２．研究の目的

本研究は，「子どもの学力向上のキーは，教材そのものにあるのではなく，その教材を通していかに子どもに思考をさせるかにある」との認識にもとづく。教師の子どもへの働きかけが学力向上への基礎基本であり，多様な働きかけの可能性を有する「教育メディア」を活用した授業を実践できる教師集団の形成が，緊急かつ重要な課題であるととらえる。この課題に応えるために，ベテラン及び中堅の教師が授業，とりわけ，他者の授業における教育技術をどのようにとらえているかという視点を明らかにし，教師の本務である子どもとの関わりを通した「メディアを活用した学習指導における授業研究体制」を提案し，授業改善に資するところに特徴がある。そこで，次の点に焦点をあて，研究を進めた。

A-1) 学校教育現場における校内研修会等における質の高い授業研究体制の実践化

A-2) 暗黙知である教育技術に焦点をあて，その伝達可能化

B-1) 教育メディアを活用した教材化力の向上への方策

B-2) そのための校内研修の方法

なお，ＡとＢは研究の領域であり，過程を示すものではなく，相互に関連するものである。

３．研究の方法

およそ次の５つの枠組みで研究を進めた。

① 改めて校内授業研究会の課題を探るため

に，明治期以降の校内授業研究会の持ち方やテーマについて，歴史的に概観した。

② 校内授業研究会に関する秋田県内の教員の意識調査を行い，校内授業研修会の持ち方に関する意識分析を行った。また，県外の２小学校の協力を得，その比較を行い，研修としての校内授業研究会プログラムの在り方と，その課題について再検討を行った。

③ ②にもとづき，校内研修会のスタイルとしてのワークショップ型の研修会方式の定式化とその実践に努め，その紹介等を行った。とりわけ，数校の協力校に年間に複数回にわたる訪問を行い，校内授業研究会の指導・助言・参観等を行い，上記のねらいを達成する研究会を目指した。

④ さらに，③の成果を市町村教育委員会との協力のもとに，一つの学校内に留まらすに広がりある授業研究会を目指す試みを最終年度に行った。

⑤ 紙媒体を用いたカードによる授業改善を目指す試みを行った。

これらの研究成果を別冊の研究成果報告書にまとめた。

４．研究成果

主な研究成果を，６つの領域に分け，以下に，記述する。

(1) 校内授業研究会の歴史的概観から

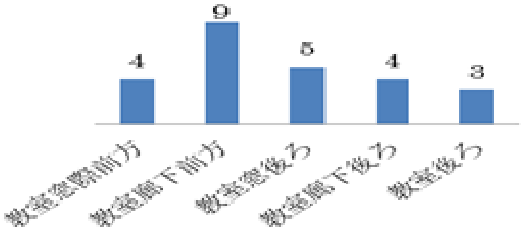
明治期の実地授業批評会にはじまり，連綿と続いてきた特徴的な校内授業研究会の形態を概観し，現在においては同僚性あるいは日頃の談話が重要であることを指摘した。

(2) 校内授業研究会に関する意識調査

秋田県Ｙ市の全小学校の教員を対象に校内授業研究会に関する調査を 2010 年度に実施した。その結果からは，少なくとも，次のような工夫が必要であることを見いだした。

①授業をビデオカメラで撮影・そして活用すること
②少人数で協議をすること
③授業者が参観者に授業参観の視点，協議会で語ってほしいことを示すこと
④参観者が「授業者が気付かなかった子どもの姿」を語ること
⑤参観者は「自分が参考になった点」を授業者に伝えること
⑥教師の学び合いの場として協働性や同僚性を高めること
⑦「子どもの学びの事実」をもとに語ること
⑧新たな工夫のある協議会が求められていること

さらに，秋田県外の校内研が活発である学校との比較を試みた。その結果の一部を以下に示す。普通教室での授業参観の際に自分がどのような場所に立つかという立ち位置について問うと，研究が不活発な学校では，教室の後ろで椅子に腰掛けたままという事例さえあるが，活発校では，子どもの表情をとらえるために，比較的に教室の前方に立つと



いう回答が多い。

図２．普通教室での授業参観の際の主な参観位置（秋田県外の活発校）

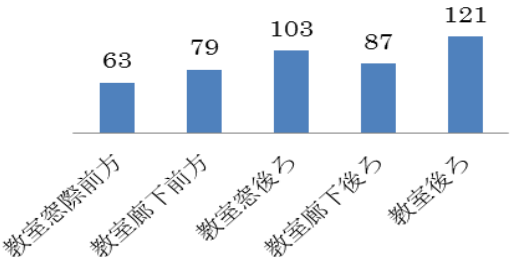


図３．普通教室での授業参観の際の主な参観位置（秋田県Ｙ市の事例）

また，活発な協議が行われている学校では，次のような特徴的な発言等が多くみられ，そのことにより，多様な効果を生み出しているということが見いだせた。

①日常の学級の様子と関連付いた発言
②授業者と子どもとの知識量の違いによるズレについての子ども立場のからの語り
③同一の子どもに対する参観者の見取りの違いを語れる
④子どもの学びの姿を再現して語る
⑤子どもの納得（分かった！）への支援のよさや，代替案の提言がある語り
⑥養護教諭や栄養教諭の参加とその語り
⑦一人一人の語りが長い
⑧子どもの名前（固有名詞）が多く出る
⑨授業者への質問や確認事項が少ない
⑩授業者の指導方法，授業の展開方法についての否定的ではなく，共感的な語り
⑪司会者は方向付けたりまとめたりしないが，参加者全員の語りによって，様々な切り口から授業が再現されていく。
⑫授業の改善の方法について直接的には語られないが，授業改善につながる子どもの事実と事実の解釈が参観者から出されるため，改善に必要な情報が多く得られる協議会

(3) 公立中学校におけるワークショップ型校内研修を核にした授業力向上の取組

秋田県内Ｔ中学校の校内研修会に継続して関わり，校内授業研究会のスタイルの選択の変容と，その理由を追跡した。

初期の実践からは，図３のように，ターゲット(研修のねらい)によって，効果に違いがあることを見いだした。

ターゲット	教師		子ども
	教科の内容 教科に依存する方法	授業の展開 授業技術	子どもの学び 協同学習
従来型	Ａ１	ａ１	
ワークショップ型	ｂ１	Ｂ２	Ｂ３
子どもの学び型		ｃ２	Ｃ３

図４　研修ねらいと研修のスタイル

その結果，ワークショップ型が最も広いターゲットに対応できることがわかり，同校での研修形態は翌年度からはすべて付箋紙を用いたワークショップ型の研修形態になった(全教員が年に一度，授業提示をする。多くは学年単位で実施)。同校においては，「天中方式・付箋研修」と称して，生徒の学びの事実を根拠にして(付箋紙にできるだけ記録して)，付箋紙を用いたワークショップ型の研修が定着した。様々の意見や感想などが出しいやすい雰囲気や教科の枠組みにとらわれずに話し合いが成立すること，その結果，学校全体の研修が同じ手法で進められるというような効果があげられている。一方で，転任者等を含めてこの手法や方式によるメリットの理解が不十分なまま実践されていたと思われる指摘もあり，一層の共通理解のもとに実践することの必要性が見いだされた。

(4) 保幼小中の連携教育での授業研究会の試み

0 歳～15 歳という保育園・幼稚園・小学校・中学校という４校園全体を貫く一貫教育を体系的に進めようとする実践はまだ少ない。そこで，秋田県・大潟村の協力を得，2012 年度からその実践に共同で取り組んだ。

この連携教育を推進するために，同一の視座からの子ども達の見取りや授業参観を行い，共通の吟味が可能になるよう「連携の三重点(共通実践事項)」を設定しているところにこの実践の特色がある。この三重点毎に，さらに下位項目(共通実践項目)を３つずつを設定している(表１)。また，これらの項目は，学校経営案等にも明文化し，その具現化を目指すようにした。

連携教育を推進する上での組織は，この「学び」「育ち」「心」という 3 班と，接続部分に焦点をあてた「連携保幼」「連携幼小」「連携小中」という 3 部会を設置した。４校園の教職員は 3 班のいずれか一つの班と，3 部会のいずれか一つの部会の両者に所属する。

さらに，これとは別に，干拓から 50 年あまりが過ぎ，至る所に見られるようになった「自然」を学習に取り入れることも，一つの大きな課題として取り上げた。

表１　連携の三重点(共通実践項目)

三重点	下位項目
学び	①「考える力」の育成 ②「表現力」の育成 ③「意欲的に学ぶ態度」の育成
育ち	①「規範意識」の育成 ②「健康・安全意識」の育成 ③「主体的な行動力」の育成
心	①「優しい心」の育成 ②「たくましい心」の育成 ③「ふるさとを愛する心」の育成

2012 年度は，４回の授業を対象とした検討会を計画し(5，10，11，2 月)，ほぼ全教職員の参加により，実施している。提案授業(保育)を４校園の教職員等が参観し，その後は，表１の「学び」「育ち」「心」の３つの部会に分かれ，授業(保育)検討会を行うという形式で実施した。

その結果，「公開保育・授業を通して，相互理解はまだだが，０歳から１５歳までの子どもの育ちのつながりが見えてきた」「２～３年「自然」をテーマに進めて，その後他の視点を研究していくのがいいのではないか」「２～３年間は班メンバーを変えずに進めたい」という指摘が多く見られた。一方で，「共通の視点や話題をもっと明確にして（絞って）公開研究会を行った方がいい」「同一の学年を対象に年次を変えて公開し，成長を確認する」というような一歩踏み込んだ提案も見られた。

(5) 小学生用『IDEA CARD』の開発と，それを活用した児童の対話

子どもがブレインストーミングの方法を学び，それを活用して対話を効果的に進めるための「IDEA CARD」を開発した。教師自身も小グループの学び合いの経験は少なく，それを指導する方法も経験的には不慣れである。そこで，このカードを指導することを通して，教師自身が，拡散的な思考ができるようになることも目指している。

そのための基礎的なカードの開発とその実践に取り組み，このカードを用いることにより，発散的な思考が高まることを確認した。

一方，カードを用いた学習を経験しても，そのようなカードを用いないと，学習したブレインストーミングのルールを用いることが難しい（ルールを忘れてしまう）ということもあり，その定着の指導が今後の課題となった。

(6) これらの成果を別冊にまとめた報告書を作成した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 14 件）

① 加賀秀和・浦野弘(2013)「小学生用『IDEA CARD』の開発と，それを活用した児童の対話の試み」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要,第 35 号,131～141 頁
② 浦野弘・加賀秀和(2013)「『小学生用 IDEA CARD』を活用した児童の対話の試み」日本教育工学会研究報告集，第 13 巻，第 1 号，251～256 頁
③ 浦野弘・藤垣雅明 (2012)「秋田県大潟村における一貫教育を目指した保幼小中の教員研修の試み」平成 24 年度日本科学教育学会第 2 回研究会研究論文集，第 27 巻，第 2 号，79～82 頁
④ 小松正子・浦野弘(2012)「自己の授業を対象にしたミニ校内授業研究会における授業者の学び」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，第 34 号，187～193 頁
⑤ 石橋研一・浦野弘・神居隆・斎藤孝(2012)「教員研修講座における解体したブタの内臓を使用した解剖実験の試み-研修成果の授業への活用を目指して-」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，第 34 号，195～202 頁
⑥ 三橋功一・山崎正吉・南部昌敏・浦野弘・小林稔・井上久祥(2011)「免許更新講習(選択)における授業観察に気づきを活かした協働授業研究の研修方法の開発」平成 23 年度日本科学教育学会第 3 回研究会研究論文集，第 26 巻，第 3 号，41～46 頁
⑦ 南部昌敏・金城勲・上原周子・上江田敏博・上原勝晴・小林稔・浦野弘・三橋功一・井上久祥(2011)「協働と省察による校内教員研修が教師の授業力の向上に及ぼす影響(3)」第 18回日本教育メディア学会年次大会発表論文集，第 18 巻，39～40 頁
⑧ 南部昌敏・金城勲・ 小林稔・浦野弘・三橋功一・井上久祥(2011)「協働と省察による校内教員研修が教師の授業力の向上に及ぼす影響(2)」日本教育工学会第 27 回全国大会講演論文集，第 27 巻
⑨ 浦野弘(2011)「公立中学校におけるワークショップ型校内研修を核にした授業力向上の取り組み －学校改善プランの即した一年間の実践を通して－」，秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，第 33 号，111～121 頁
⑩ 石橋研一・浦野弘(2011)「新しい小学校学習指導要領に対応した理科実験に関する教員研修の成果と課題 －実感を伴った理解に結びつく実験の工夫－」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，第 33 号，133～142 頁
⑪ 南部昌敏・長谷川秀紀・金城勲・小林稔・浦野弘・三橋功一・井上久祥(2010)「協働と省察による校内教員研修が教師の授業力の向上に及ぼす影響-沖縄県島尻地区におけるワークショップ型校内教員研修の実施をとおして－」，上越教育大学研究紀要，第 30 巻，85～94 頁
⑫ 浦野弘(2010)「多忙な中学校における校内授業研修会の開催方法に関する調査」平成 22 年度日本科学教育学会第 1 回研究会研究論文集，第 25 巻，68～71 頁
⑬ 南部昌敏・長谷川秀紀・小林稔・浦野弘・三橋功一・井上久祥(2010)「協働と省察による校内教員研修が教師の授業力と児童の学力向上に及ぼす影響－東京都荒川区立尾久第六小学校におけるワークショップ型校内教員研修の実践を通して－」日本教育工学会第 26 回全国大会講演論文集，第 26 巻,383～384 頁
⑭ 南部昌敏・金城勲・小林稔・浦野弘・三橋功一・井上久祥(2010)「協働と省察による校内教員研修が教師の授業力の向上に及ぼす影響-沖縄県島尻地区におけるワークショップ型校内教員研修の実施を通して－」第 17 回日本教育メディア学会年次大会発表論文集，第 17 巻，55～56 頁

〔学会発表〕（計 4 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等なし

６．研究組織
(1)研究代表者
浦野　　弘（URANO Hiroshi）
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：50185089

(2)研究分担者
南部 昌敏（NANBU Masatoshi）
上越教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：90143627

(3) 研究協力者

小松 正子　(KOMATSU Masako)
秋田県湯沢市立駒形小学校・教諭

加賀 秀和　(KAGA Hidekazu)
秋田県由利本荘市立新山小学校・教諭